

上智大学中世思想研究所編集

中世の教育思想（上・下）：教育思想史 III, IV.

昭和59年，60年，東洋館出版社，上 502 頁，下 494 頁。

八 卷 和 彦

この上下二巻の分厚い書物は、一昨年より刊行されている「教育思想史」全六巻の一部を担うものである。宮本久雄氏が本誌26号の本欄で論評されたものの続巻にあたり、6世紀以降15世紀前半までの約一千年にわたる西洋中世における教育思想を次のような前提に立って論じている。「ここでの『教育思想』とは、狭い意味での教育の諸段階や諸分野の理論だけに止まらず、教育者像や、学ぶことや教えることの理論、文化論や学問論、さらには各時代に行き渡った人間像やその哲学的基礎をも包含するものである」（序言）。本書のこの広く深い定義は、現代に一般的な、極めて狭く技術主義的な「教育思想」を本書に求める人を裏切るであろう。しかし、教育についての議論が沸騰している現今のわが国において、その前提の思想がいぜんとして極めて技術主義的なものにとどまっておき、そもそも教育とは人間存在にとって何であるのか、といった深い問いを欠如したまま喋々しているかのような風潮をみる時、この定義はそれらに根本的な反省を迫りうるきわめて有益なものであると思われる。その意味において本書の内容は、その裏切りのゆえに今大きな「教育」の力を有しているであろう。

さらに、評者の知る限り、わが国の「西洋教育思想史」と題する書物のほとんどが、古代ギリシアには言及するとしても、その叙述をルネサンス期から始めることでことを済ませている。このことは、しかし、たんに教育学の専門家だけの責任ではなく、従来のわが国の西洋理解の総体がまことに平板で「近代主義」的な偏りを

もっていたことに起因するであろう。だが、本書を手にした今、われわれは、この欠落が近年急速に是正される水準に達した、と言いうるであろう。わが中世哲学会の多くの会員が本書の執筆者として参画していること、および本書の準備作業が進められていたであろう頃に「中世におけるヒューマニズム」という一連のシンポジウム（1978年度～1980年度大会）を開催したこと、等によって、中世哲学会がこの機運にすくなくならず貢献していることは、私も一会員として同慶にたえない。

さて、本書の膨大で実り豊かな内容は、上掲の序言の定義にしたがって、以下に紹介するように系統づけられ構成されている（なお（ ）内は執筆者）。上巻：概説「中世前期の教育思想」（大谷啓治）、「中世における自由学芸」（岩村清太）、「暗黒時代とトゥールのグレゴリウス」（橋本龍幸）、「司教座聖堂付属学校」（朝倉文市）、「中世前期の民衆教育」（樺山絃一）、「カロリング・ルネサンスとアルクイン」（松川成夫）、「エリウゲナ」（今義博）、「十一～十三世紀の修道院教育と修道院学校」（今野国雄）、「カンタベリのアンセルムス」（印具徹）、「ペトルス・アベラルドゥス」（大谷啓治）、「ベルナルドゥスとエルレドゥス」（山崎寿雄）、「サン＝ヴィクトルのフーゴー」（五百旗頭博治）、「ソールズベリのヨハネス」（田中峰雄）、「ビザンティン帝国における教養と信仰」（森安達也）、「キーエフ・ロシア」（古谷功）、「中世前期アラブ思想とアヴェロエス」（田中千里）、「ヘブライズムの伝統とモーゼス・マイモニデス」（小山宙丸）。下巻：概説「中世後期の教育思想」（大谷啓治）、「騎士道の教育思想」（木村直司）、「十三、十四世紀におけるドミニコ会の教育」（竹島幸一）、「中世大学」（横尾壮英）、「リールのアラヌス」（エリザベート・ゴスマン）、「ボナヴェントゥラ」（坂口ふみ）、「トマス・アクィナスの知識論」（稲垣良典）、「トマス・アクィナスの教育論」（三上茂）、「ライムンドゥス・ルルス」（野村銑一）、「ボヴェーのウィンケンティウス」（K. リーゼンファーバー）、「マイスター・エックハルト」（上田閑照）、「ダンテ・アリギエーリ」（須賀敦子）、「ドゥンス・スコトゥスとオッカム」（大村晴雄）、「ハインリッヒ・ゾイゼ」（鈴木宣明）、「ジャン・ジェルソン」（森田良紀）、「中世後期の宗教的民衆教育」（E. ルッカー）、「イスラムにおける教育とイブン＝ハルドゥーン」（森本公誠）。本書は「中世の教育思想」という標題であっても、上掲のように、中世と関わりのある外の世界の教育思想、イスラーム、ユダヤ教およびビザンティン帝国等にまで目配りをしており、ま

た一般民衆への教育の状態にも目配りしている。これによって本書の内容は大いに立体的になっている。さらに従来わが国では殆ど紹介されることのなかったリールのアラヌス、ポーヴェのウィンケンティウス等の思想家が論じられていることも本書の特色の一つである。

さて評者は、この膨大な「中世教育思想史」全二巻を極めて多くの事柄を学びつつ読み終えて、いわば一個の人間としての「西洋中世」が成長する過程に立ち合ったように思われる、とその読後感を述べることができる。これは、シャトルのベルナルドゥスの「われわれは巨人の肩ののった矮人である」という言葉、そしてソールズベリのヨハネスやリールのアラヌス等によっても引用されるほどにこの時代の知識人の自己理解を規定したこの言葉に触発されてのことでもある。それはまた、この「中世」が、古代から近代へと移り行くその中間の時代としての「中世」というにとどまらず、西欧という一つの地域がキリスト教を通して新たに文明開化されていく過程としての「中世」でもあるという特質を考えあわせてのことでもある。

先ず「中世」の学びは、「ガリアの諸都市では学芸が衰え、いやむしろ滅んでしまった」という6世紀末のトゥールのグレゴリウスの自己認識と学びへの欲求から始まっている。この渴きに応えたのが、広い西欧に点在した、7、8世紀のアイルランド、イングランドの修道院文化であり、司教座聖堂付属学校であった。これを基礎にして8、9世紀に至りカロリング・ルネサンスが成立するが、これとてもまだ宮廷学校を中心とする、内容的にも制度的にも断片的なものであった。

10世紀末から12世紀にかけて、中世の学びは言わば青年期に達したものとして、大きな変化が見られる。いわゆる12世紀ルネサンスへと結実するものである。それまでは受容ないし調整という受動的であったその学びの姿勢が、シャトルのベルナルドゥスの上掲の言葉に典型的に見られるように、積極的になり、古典の伝統を自らの観点から統合する力量を備えるに到ったのである。ベルナルドゥスの言葉は、人間の青年期に特有の、自負心と自己卑下のないまぜになった自意識の表現と見做すこともできるだろう。またこの時代には、青年期特有の旺盛な知識欲に基づいてとても言うように、眼が外に向けられてアヴェロエスやモーゼス・マイモニデスの学説が摂取されている。また青年期によく見られるように、互いに対立するような多様な思想が同時に現れている。論理を重視するアベラルドゥス、修道院

に沈潜して愛徳を説いたクレルヴォーのベルナルドゥス、あるいは広汎な知識の統合を図るサン＝ヴィクトルのフーゴーである。

そして13世紀から14世紀にかけて中世は遂に成人に達する。学問を、独立して専門的に扱い研究する機関としての大学が続々と成立する。その影響力が現代にまで及んでいるのは、もはや言うまでもない。ボナヴェントゥラの、徹底した「キリストへのまねび」の思想の中にあっても「中庸の徳」「『和』への努力」をも忘れることのない姿、トマス・アクィナスやルイスに典型的に見られる「人間の本性」にたいする冷静な考察、またボヴェーのウィンケンティウスの場合を一典型とする実践的な君主鑑への要請とそれに応じた執筆は、いかにも中世が一個の人間として成人したしるしであるように思われる。さらにこのことは、何よりもトマスが、内なる伝統と外からの影響をキリスト教世界に特有の立場でみごとに統合し、新たに巨大な思想を構築したという、あの営みに現れており、そこには落ち着いた大人の風格が十分に伺われる。この段階に至ると、中世はもはやベルナルドゥスの言のように巨人に肩ののって自らの視点の高さを維持しているのではなく、巨人の肩の高さと自己の身の丈とを一体化して、その高みをまさに自分の身の丈としているのである。

その後、14～15世紀前半の諸々の思想には、人生のアクメを過ぎつつある一個の人間の想念、自己のこれまでの思想の中から生み出されたには違いないが、その全面的展開と解決は次の世代に委ねざるをえないようなものがうかがわれる、としたら言い過ぎであろうか。エックハルトにおける「我性の放棄」、ドゥンス・スコトゥスにおける「個体への着目」等はこのような問題状況をめぐっての例になるように思われる。このような、西洋中世という「人物」がその時々の教育思想に基づいて教育を受けつつ成長し、遂には自らのデザインに基づいて自己を教育するに至る過程を描くものとして、本書の諸論文が存在しているように思われるのである。

さて教育思想における古代ギリシアの特質が「パイディア」にあるように、中世においてその特質を求めるとすれば、それは「Imitatio Christi」にあると言っているのではないだろうか。本書に従って中世の歩みを跡づけ、さらに次のような教育観を考量するとき、これは十分に支持されうるように思われる。「中世の教育観によると、人間の究極目的は神との直接の交わりによる至福にあるが、教養とは、そうした究極目的の理念のもとで、人間の精神のうちに世界という、形に具現した神の

思想の秩序を刻印するところであるとされる。そうすることによって教養は人間を、その偶然的で特殊な在り方から解放し、真理の充実へと参与させようとする」(リーゼンフーバー論文)。「Imitatio Christi」の思想は、本書の論文の中に、「エリウゲナ」にも「ベルナルドゥスとエルレドゥス」にも見出され、その頂点はやはり「ボナヴェントゥラ」である。その後も、例えば「ゾイゼ」にも、「中世後期の宗教的民衆教育」に叙述されている民衆の信仰生活の日課のなかにも見出される。

古代ギリシアの「パイディア」が、イエーガーの言うように中世をも貫いているとしても、また「Imitatio Christi」の思想の前提を形成している「教師キリスト」という考えが、これまたイエーガーの言うように、その嚆矢たるアレクサンドリアのクレメンスにおいてプラトンが『法律』において「教育する」という言葉に付した哲学的意味に非常に近いとしても (Jaeger, *Early Christianity and Greek Paideia*, p. 60), 「Imitatio Christi」と「パイディア」の在り方を比較してみれば、やはりここには独自のものが存在していることがわかる。「パイディア」は、ギリシア人のたゆまぬ努力によって、その理念はもとより、それに向かう方法も高度に構造化、組織化されたものとしてある。例えば、あの、師ソクラテスを祖述することで哲学していたかのように見えるプラトンでさえも「真のパイディア」を語る際には (例えば『国家』において)、師ソクラテスに語らせているのではあるが、師ソクラテスという人間像にそこで積極的な役割を果たさせることはなく、その人間像から離れて極めて分析的、一般的に語っているのである。

これに対して「Imitatio Christi」の場合は、上掲の中世教育思想の根本に則りつつ、徹底的にイエス・キリストという一個のペルソナの全体に関わり続け、それを模範としてまねぶのである。例えばボナヴェントゥラの場合、キリストは「内でも外でもあるゆる面で教える教師、『万人の唯一なる教師』Christus unus omnium magister なのである」。したがって「教師は範型であり仲介者であるキリストをまねることによって自らキリストの像として人々の範型となり仲介者となるという考えが教師論の中心である」(坂口ふみ論文)。

神人キリストは、まさに中世の教育思想における究極目的の体現者であるゆえに、中世の人々は各自がキリストからその都度かれらの教育の理想とその実現の方を汲み取り、その実践につとめたのである。これに対しては次のような見解があ

るかもしれない。「パイディア」においても、これに類した教育思想はその初期にホメロスの物語の果たした役割として見出すことができるが、それをギリシアの「パイディア」は「卒業」してきたのだ。しかしこの「Imitatio Christi」をそのようなものと見做してすまずことはできないだろう。その思想の理論的根拠は、言うまでもなくキリスト教の形而上学にあるのだが、同時に「神（神・人）をまなぶ」という態度の淵源はやはりヘブライズムの伝統であるようだ（小山宙丸論文）。またこの思想は、人間の究極目的としての神との直接の交わりをその理念としているゆえに、人々のその時々我真摯な希求に基づいてその内容が探究され、実践されるのである。このことは上掲の諸例が示している。ときには互いに矛盾することさえもあるほどに豊かなものを引き出しうる。したがって、それはキリスト教の内部改革の論拠ともなりえたし、さらには正統にたいする異端を招来することもあったほどである。常に自己を批判的に反省し、時にはその否定すらも辞さないという姿勢、この自己超越的な態度こそ人間の教育の特質が存在するのではないだろうか。

本書の豊饒な内容は、他にも読む者に多様な読み方を許すだろう。その辺りのこととも関わって、以下にいくつか気付いたことを記してこの稿をしめくくりにしたい。樺山論文に少し言及されているが、キリスト教以前の土着文化とキリスト教文化との中世における相剋という視点も「教育思想」という領野に入りえたのではなかろうか。また、既に紹介したように周辺文化の教育思想の論文は収められているが、それらと西洋中世の教育思想との相互影響に関する考察も必ずしも充分とは言えないように思われる。また、冒頭で言及したように教育思想の理解について本書独特の立場と方法に拠って立っていることは、評者もまったく賛成なのだが、そのことの現代における必要性と正統性を、中世思想の立場から明確かつ綿密に論ずる独立した論文が一報所載されていてもよかったように思われる。（もちろん、「学び、且つ、教えること」「愛し、且つ、仕えること」と切り離してはならないことを説く印具徹論文をはじめ多くの論文に、その課題を充分に果たしうる内容が盛られているのではあるが、それだけに悔やまれるところである。）

しかし、以上の点は、あるいは筆者の浅学がその課題の困難さに想いを致すことなく思いつかせただけのことであるかもしれない、またむしろ今後のわが国の研究の進展にまつべき課題であるのかもしれない。そのような意味においても、参考文献

表、年表、地図、索引等を備えた本書は、今後のわが国のこの分野における教育思想の研究の発展に資する所多大であり、その刊行は画期的な意義をもっている。末筆ながら筆者および編集者の方々の御苦勞に対して、一読者としてこころから感謝申し上げたい。

Peter Riethé : Hildegard von Bingen,
Das Buch von den Steinen. Nach den Quellen
übersetzt und erläutert.

Salzburg, Otto Müller Verlag, 1979, 104 S., 24 farb. Abb.

塩 谷 元 紹

本書は、西独の歯科学者 Peter Riethé (1979年現在 Tübingen 大学正教授/以下R) の手に成る聖ヒルデガルト (以下H) *Physica* 第4書「石の書」(*Lib. IV. De lapidibus*) の「初の完訳」(R)であり、Salzburg・Otto Müller Verlag から刊行の独訳によるH全集の、刊行順で第8巻目に該当するものである。因みにRのH研究がこれ以前に生み出した大きな業績は次の2つである。—①学位論文：Der Weg Hildegards von Bingen zur Medizin unter besonderer Berücksichtigung der Zahn- und Mundleiden (Med. Inaug. Diss. Mainz, 1952). ②*Physica* 全9書の抄訳：Hildegard von Bingen, *Naturkunde. Das Buch von dem inneren Wesen der verschiedenen Naturen in der Schöpfung. Nach den Quellen übersetzt und erläutert von Peter Riethé* (Salzburg, Otto Müller Verlag, ¹ 1959, ² 74, ³ 80). (これらの業績への学術的評価は、既に Kassius Hallinger が後者の抄訳に対する書評[in *Archiv für mittelhheinische Kirchengeschichte* 12 (1960)]の中で显示済みである。)

さて「石の書」(訳出の底本・Migne 版テキスト [PL t. 197 所収/以下M] で